

2011年度 年次報告書

2011年4月1日～2012年3月31日



3・11

アジア学院と 東日本大震災

震災直後のキャンパスが散らかれ、建物や地面にひびが走る。



スタッフとボランティアたちは野外へ避難し、次の日から復旧作業に尽くす。



4月：職員全員が農村伝道神学校を訪れ、避難研修の可能性を話し合う。



12月：震災でダメージを受けた本館を取り壊す作業が始まる。アジア学院の初期からある建物であった。

理事長・校長からのごあいさつ

ごあいさつ

昨年 3 月 11 日に起こった東日本大震災と、それに伴って起こった福島第 1 原子力発電所事故は、広範囲にわたる被害を人々や建物に与えました。この地震によってアジア学院は、大きな建物被害を受け、理事会は、2011 年度研修開催のための応急建物復旧工事とともに、安全上被災建物の建替えを決議し、「アジア学院災害復旧・復興工事計画および資金計画」に基づいて復興工事計画を実施しました。

また、福島第 1 原子力発電所事故による放射能漏れ事故は、福島原発より 110 km 南西に離れた那須塩原市にあるアジア学院の土・農作物・家畜にも放射能汚染をもたらし、放射能除染のために大きなエネルギーを費やしました。更にアジア学院では、①キャンパス内の土・水・農作物・肉・タマゴなどの放射線量の計測、②キャンパス内の除染への取組み、③「那須を希望の皆に」市民グループとの集会開催・除染への共働の取組み、④2012 年 1 月より市民の協力を得て、一般向け食品放射線計測サービス「アジア学院ベクレルセンター」を開設しました。このため日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室は、放射能測定器（シンチレーション・スペクトロメーター）を寄贈下さいました。

更に、東日本大震災・福島第 1 原発事故は、目前に迫った 2011 年度研修に大きな影響を与えました。初めの 3 ヶ月間は、都内町田市にある農村伝道神学校にキャンパスを移し、且つ開始日を 1 ヶ月遅らせて 5 月 2 日に研修を開始しました。その後 7 月末に全員でアジア学院に戻り、卒業式まで研修を続けることができたのは感謝でした。しかしながら、学生の健康被害を最小限に止めるために、やむを得ず研修終了を 3 週間早めて 11 月 19 日に卒業式を行いました。

被害はそれだけでなく、安全な食糧提供の願いで始めたにんじんジュース、ジャムの製造・販売や農作物の販売などの一時中止をもたらし、アジア学院農産物売上げも減少しました。また毎年アジア学院を訪問して下さるワークカンパーやワーキングビジターのキャンセルが続き、アジア学院来訪者の大幅な減少をもたらしました。

このような困難な問題の中で多くの人々が私たちのことを心配し、訪問し、祈り、お支えを下さいましたことを心より感謝申し上げます。特に、災害復興のために国内の多くの個人（後援者・賛同者）・団体・教会及び海外の教会の皆様から多大の募金協力をいただきました。また農村伝道神学校は、アジア学院のために 3 ヶ月間に亘って学校施設を開放し、2011 年度研修の実施を可能にしてくださいました。更に、学生キリスト教友愛会（SCF）は、東日本大震災直後からアジア学院のために那須セミナーハウスを臨時本部事務所として、また一部職員の避難場所として提供してくださいました。これ以外にも様々な形でお支えをいただきましたことをこの場をお借りして感謝申し上げます。

最後になりましたが、この最も困難な時期に私たちに寄り添い、災害復興のために全力をつくされた丹羽章理事長が、2012 年 6 月 25 日に天に召されました。この間共に、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ローマの信徒への手紙 5 章 3～4 節）ことを信じて歩んできた意味を噛み締めています。



学校法人アジア学院 アジア農村指導者養成専門学校

大津 健一

理事長・校長



研修報告

農村指導者研修プログラム

教務主任 大柳 由紀子

2011年度も神様の豊かな恵みとお導きのうちに、多くの人々に支えられながら7ヶ月の研修を無事終え、13カ国19名の学生が卒業式を迎えることができましたことを心より感謝申し上げます。

この一言をいえる日が来ることに私たちは確信がありませんでした。そして今、皆様方のお支えにより、そして学生たち一人一人の大いなる挑戦により、このようにご報告できることを感謝いたします。

岐路に立つアジア学院

東日本大震災により、学院も大きな被害をこうむりました。さらに追い討ちをかけた福島第一原発の事故。原発から110キロ、この那須塩原も放射能による汚染がみられます。当初はどの程度の汚染をうけるのか誰にもわからず、そもそも事故が収束するのかどうか不安に感じる日々でした。

震災後、まず私たちは今年度の研修をはじめかどうかを話し合いました。頻繁に起こ

る余震、被害規模のまだわからないキャンパス、収束しない原発事故。今年度の研修はすべきではないという意見も出ました。しかしながら、既に合格がきまり、各国で候補生たちが待っています。一年間研修を休んだとして、では彼らは来年度来ることができるのか。草の根のリーダーである彼らにとって、今年がだめならば来年と簡単には言えません。もう一つの点は、彼らは自分の学びのためにここに来るのではなく、その学びを地域に持ち帰るために学院にやってくるということでした。「一人の研修をできないことは、その影響は一人にとどまらない。それを考えたら、研修をここで止めることはしてはいけないのではないか」そしてなによりも、支援者の皆様のお支えが、卒業生たちの声が私たちを後押ししました。今年度の研修を始めよう。これが3月末の職員会議の結論でした。

しかしながら、研修を簡単に始められるような状況ではなかったのも事実でした。まずは研修開始を一ヶ月遅らせること。そして最初の数ヶ月を学院外で研修を行うこと。この点

に関しては、幸いにも東京都町田市の農村伝道神学校が快く受け入れを決めてくださいました。しかも寮、職員住宅一軒、食堂、教室、事務所、そして畑まで使わせていただけるという全面協力でした。学生20名と職員・研究生・ボランティア10名が農村伝道神学校にて研修を行う、他の職員・ボランティアは学院に残って業務と農場管理および復興に携わる。そんな形で2011年度の研修が始まりました。

研修を東京に移す

今思い返してみると、例年と最も違う点は、長さよりも人数よりも周りの日本人の反応ではないかと思います。学生は頻繁にこう言われました。「こんな大変な年に、日本に来てくれてありがとう」。しかし本当にそうだったのでしょうか？ つまり、彼らは大変な年に日本に来ることになってしまった、可哀相な年だったのでしょうか？

今年度の研修は、たしかに日程的には例年よりも2ヶ月近く短い日程となりました。削られたのは自習時間・農作業・夏季プロジェクトが主なものでした。クラスはほとんど削られず、そのため祝日はほぼ返上となりました。カリキュラムのデザインもずいぶん変更となりました。講義類・ディスカッションは前半に多く配置され、畜産実習と栃木県内における見学研修は後半に移りました。農村地域研修、西日本研修旅行は例年よりやや長い日程となりました。これには学生の被曝量を減らすという意味合いもありました。



町田市にある日本聾話学校を訪れる学生たち



神学校のキャンパスでたき火を囲む友から

予期しない学び

今年ならではの研修もありました。ジョセフ・オザワ博士による「緊急事態対処」の講義、津波被災地・気仙沼への訪問と地域再建からの学び、水俣滞在日程を延ばしたことで、漁船に乗って水俣の町を海から眺め、汚染を引き起こした工場の小ささと汚染された海の大きさとを実感もしました。東京にいる間は、さまざまな交流会を持つこともできました。

先日学生に「今年の研修は危機的状況にある日本で行われた。ここから何か学んだか？」と質問をしました。その答えの中には「この困難な状況をどう扱うかということと、いかに互いを励ましあっていくかということ学んだ」「危機的状況にあって何かを成す勇気が必要なのだと思う」「開発そのものについて深く考えさせられた。山に登ることを知っているのならば、おりのことも知らなければならない。開発も同様だ。」といった意見が寄せられました。

もちろん、不安を持ち続けた学生たちもありました。放射能汚染という今まで私たちが経験したことのない状況、汚染状況がなかなか把握できず、あるいは農作物への影響が予測がつかない中、一番戸惑っていたのは職員だったかもしれません。そんな中、ある学生がこう語りました。「僕らはこの研修参加への合意文書にサインをしたときから、どんな犠牲でも払う覚悟はできている。今年の研修に加わるということは単に機会を与えられたというだけではない。これは召命なんだ。」

今年ほど、強い使命感に燃えて研修に取り組んだ年度はなかったと思います。学生たち

は明確にこの研修の意味と意義、そして誰のための研修であるかを理解し、言い表し続けてきました。

今年度学生の多くが一番の学びとして取り上げたのは Globalization と Localization でした。地域の資源がいかに見捨てられているか。(我々のいう地域資源とはたとえば粃殻、生ごみ、雑草、竹、落ち葉など、いらぬものとみなされているものことです。)あるいは伝統や文化が廃れていく現状にいかに向かうか。日常生活で、農場で、その思想をいかに取り入れていくか。さまざまな面から話し合われ、学びは深められていきました。「本当の意味での開発とは、豊かさとは何か。」6月の教団ホームステイプログラムの発題が、今年度の学びを特徴付ける言葉になったと思います。

今年度の研修では、いつにもましてさまざまな方にお世話になりました。農村地域研修では山形県置賜地域、戸沢村、庄内地域、秋田県仁賀保地域の農家・行政・農業関連施設の皆様、被災されて困難な時期にもかかわらず私たちの学びになるならと快く研修を受け入れてくださった気仙沼の皆様。西日本研修においては静岡の聖隷学園、大阪南YMCA、水俣はんのうれん、同志社大学ハビ

「内なる祈り」

有機農業を通して苦しむ土を癒し、自然の力ですこやかなコミュニティを作ってゆこう。

多量の化学物質によって滅びようとしている母なる大地の叫びに耳を傾けよう。

神を愛し、隣人を愛し、土を愛し、自然を守り

次の世代へとつながるすばらしい世界を作っていこう。

神が常に私たちに祝してくださいますように。アーメン

ジェームズ・サン・オウン

2011年度 カリキュラム活動

Practical Field Study (有機農業実習)

以下の有機農業、畜産、食品加工の論理的および実践的知識の習得を目的としている

ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、炭焼きと木酢作り、粉殻くん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り、養豚(人工授精、出産、去勢)、家畜衛生、飼料配合、育雛、発酵床式畜舎、発酵飼料作り、肉加工(ソーセージ、ハム)

コミュニティーを基礎にした活動

グループによる農場管理活動(野菜作物栽培、および畜産)

フードライフワーク

自給自足のための農作業および給食準備

コミュニティー・ワーク

田植え、稲刈りなど

内的成長を促す活動

朝の集会、Growth File、コンサルテーション、振り返りの日

口頭研究発表会

学校行事

収穫感謝の日(HTC)
入学式、卒業式

コミュニティー形成活動

ピクニック、遠足、スポーツイベント

国際交流プログラム、ホームステイプログラム

見学・交流等、研修でお世話になった方々(順不同・敬称略)

【被災による一時研修受け入れ先】 学校法人 鶴川学院 農村伝道神学校

【農業関連見学・研修先】 帰農志塾(有機農業)、ウィンドファミリー農場(有畜複合農業)、金子美登・石川宗朗(有機農業)、田下降一(有機農業)、桑原衛(有機農業・バイオガス)

【見学先・交流団体】 ◎栃木県 那須野ヶ原博物館、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、大田原カトリック教会、国際医療福祉大学、矢板教会、塩谷一粒教会、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、四條町教会、宇都宮上町教会、鹿沼教会、松が峰カトリック教会、松原教会、氏家教会、栃木教会、足尾銅山鉱毒事件学習(旧松木村跡、足尾製錬所)、足利教会、足利東教会、渡瀬遊水池、小山教会

◎東京都 日本キリスト教団全国教会婦人会連合、日本パプテスト同盟婦人会、東京ユニオン教会、西東京ユニオン教会、鶴川教会、鶴川北教会、生田教会、グレイスクリスチャンフェローシップ教会、ICU 教会、町田カトリック教会、日本聾話学校

◎他府県 渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟会(板橋明治)、横浜ユニオン教会、しゃれべん会、アジア学院後援会・会員、各地ロータリークラブ

【農村地域研修】 ◎山形県置賜地区 渡部務・美佐子、原田俊二・加矢乃、菅野芳秀、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園(安積力也校長)、黒沢巖、高島共生塾(遠藤周次)、高島町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、J A山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー(佐藤恵子、原田加矢乃)、川西町役場(原田俊二町長・産業振興課)、しらかのの会、米沢興譲教会、草岡ハム加工組合、小国フォルケボイスコーレ(武義和)、秋津ミチ子、登坂賢治・美紀子、本田香奈子、村岡陽子 ◎山形県戸沢村 戸沢村役場、国際交流協会、戸沢村古口小学校 ◎山形県庄内地区 加藤敏一、月山パイロットファーム(相馬一広)、共立社鶴岡生協(佐藤誠一)、志藤正一、J A庄内たがわ営農農政課、荘内教会(矢沢俊彦)、鶴岡教会(藤村直子)、藤島町農村環境改善センター、庄内協同ファーム、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、みます元氣村(加藤興治)、鶴岡市立加茂水族館、佐藤昌司、茨新田生産組合、鈴木完司、鶴岡農協西郷支所、有限会社ドリームズファーム ◎秋田県仁賀保町 土田牧場(土田雄一)、佐藤喜作、曹洞宗太白院、都市農村交流センター ◎岩手県 ウレシバモシリ自然農園(酒匂徹) ◎宮城県 菊池敏男、千葉一・直美、遠藤優子

【西日本研修旅行】 ◎静岡県 聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、遠州栄光教会、聖隷厚生園ナルド工房、山中忍(みかん農家) ◎大阪府 大阪南YMCA、関西沖縄文庫(金城馨)、NPO 釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク、希望が丘教会 ◎熊本県 熊本いのちと土を考える会(高丸和彦)、エコネットみなまた・ほんのうれん(大澤菜穂子、松永邦雄・永野隆文)、水保考証館、ほっとハウス ◎広島県 広島平和記念資料館、広島平和文化センター(スティーブ・リーパー)、岡田恵美子(証言者) ◎京都府 同志社大学国際居住研究会、フリーガイドクラブ、京都教会、丸谷一耕 ◎滋賀県 ボーダーレス・ミュージアムNOMA ◎三重県 愛農会・愛農高校(奥田信夫校長) ◎神奈川県 くだかけ生活舎、あしがら農の会(相原佑子)



2011年度 講義

*は特別講師

【日本語、日本文化】

荒川 朋子、中村 朱里

【指導者論】

アジア学院の指導者論
アジア学院の歴史と建学の精神
サーバント・リーダーシップ
参加型学習法
独立学習
発表技術
報告書作成指導
時間管理
ファシリテーション技術
非暴力コミュニケーション

天津 健一
荒川 朋子
荒川 朋子、大柳 由紀子
荒川 朋子、大柳 由紀子
スティーブン・カッティング*美紀カッティング
大柳 由紀子
スティーブン・カッティング
ティモシー・B・アバウ
大柳 由紀子
キャサリン・カデン(NVCTトレーナー)
ジェッシー・ウィーンズ(NVCTトレーナー)
安納 献、鈴木 重子
*ジョセフ・オザワ

緊急事態対処

【開発論】

グローバリゼーション
ローカリゼーション
環境と開発
栄養概論
アジアの人身売買の問題
那須疎水と西那須野開拓の歴史
足尾銅山鉱毒事件と田中正造
ジェンダー論
開発とアジア学院の使命

*立教大学 EDA・DEAR 開発教育協会、ISDEP
*鎌田 陽司(NPO 法人「懐かしい未来」代表)
*田坂 興亜(アジア学院理事)
竹内 和彦
*甲斐田 満智子(国際こども権利センター)
*田村 修也
*坂原 辰男(田中正造大学)
荒川 朋子
*J・B・フーパー(アジア学院北米後援会 ILEAP 代表)

共助組合論

台湾における平和運動

遠藤 抱一

*羅 栄光、高 俊明(台湾基督長老教会)

【持続可能な農業・技術】

持続可能な農業概論

*アルデンドウ・チャタジー
(76年卒業・インド 農業アドバイザー)

野菜・作物概論

荒川 治

畜産概論

ギルバート・ホガング、壁谷 早苗

家畜繁殖

ギルバート・ホガング、壁谷 早苗

養鶏

ティモシー・B・アバウ

家畜飼料概論

ギルバート・ホガング、

農業技術実習

荒川 治、山口 敦史、

作物病害虫管理

山口 敦史

家畜病気管理

ギルバート・ホガング

アグロフォレストリー

*山田 祐彰(東京農工大学講師)

化学農業の危険性

*田坂 興亜(アジア学院理事)

熱帯における自然農業

*村上 真平(自然農家)

パーマカルチャー

*酒匂 徹(有機農家)

日本の組合の歴史と賀川豊彦

*賀川 晋明(賀川記念館 館長)

農協の役割

*鶴岡 尚之(全国農業協同組合中央会)

適正技術

パン・ヒョンウック

生産者と消費者の提携

荒川 朋子

【その他】

日本における生活の留意点

*町田警察署

フードライフ報告

野菜作物



野菜作物職員 山口 敦史

2011 年度、野菜・作物に関しては学院内自給は 1 割近くまで落ちた。

私達が実践しているのは、生き物の繋がりの中で作物を育てていく循環型有畜複合農業です。例年なら森からの落ち葉や畑からの雑草などは有用な有機物として畑に還すよう指導、実践してきたが、資材にまで自給の範囲はひろがった。

温室の中での様々な実習

そのような中、皆様からのご支援もあり、最低限の実習圃場を確保すべく土壌表土を剥離した後、三棟の温室を建設し野菜の栽培実習を行った。温室の中では、トマトの横にはバジルやピーナッツ、きゅうりの横にはネギを植えるなど多様な作物を並列にして栽培した。作物には、それぞれ特性があり、作物の匂いによって虫を寄せ付けなくしたり、逆に益虫といって害虫を食する虫を呼び寄せ

農作業は神学校のキャンパスで続いた。



放射能予防のために野外でマスクを付ける人が多かった。

る働きがあり、農薬などを使わずに病害を未然に防ぐ技を実習を通して学んだ。

ベクレルセンターの開設

放射能には匂いも色もないため、収穫された農作物の汚染度は機械で測定するほかない。私達は右往左往しながら、諸団体に測定を依頼して対応していた。しかし、念願の高価な放射能測定器を寄付していただけることになった。これによりすべての農作物を測定できるようになった。数値として表示されることによって、安心して生産と実習が行えることになったことは確かである。

大豆・菜種の栽培を通して放射能汚染の中で生き抜く知恵を学ぶ

放射能汚染に遭遇するとは夢にまで思っていなかった農家が集まり、研究者を交えながら勉強・調査を重ねていく中で、菜種、向日葵などの油脂作物を栽培していく重要性を感じた。実は、これらの油脂作物は放射性物質であるセシウムなどを吸収しやすく、収穫後に油に加工する過程において放射性物質は

油には入り込まないという性質がある。この情報は私達農業従事者にひとつの希望をもたらした。作物の栽培を通して圃場を綺麗にし、さらに安全な食品を供給できるという。そのため、学院内にある圃場の多くに大豆や菜種を作付けし栽培を行った。学生とは大豆の栽培を通して放射能汚染と向き合うための知恵を学び、さらに彼らの地域でこれらの事故や汚染を起こさせないための議論を活発に行なった。

搾油所の設置

また、日本の身近に流通している油のほとんどは海外から輸入され、多くは化学溶剤抽出法によって油を製造したものである。そのため、より健康によい油にするために、圧搾方式で油を搾油することになった。支援者の理解と温かさが集まり、2012 年春に一台の搾油機を寄付していただけることになった。地域の農家や消費者と連携しながら放射能汚染の中で生き抜く小規模地域搾油所としての働きが期待されている。



食料自給からエネルギー自給まで

放射能汚染を通して、私達は食料だけでなくエネルギーを自給する必要があることが現実問題として突きつけられた。幸運にも、搾油所で搾油された食用油の使い古し油を加工することで、ディーゼルオイル（SVO）として発電などに生かされることがわかってきた。そのため、今後は SVO などを利用しながら、食料だけでなく、エネルギーの自給をすることこそ、地域の安定につながるのではないかとこの課題と展望が開けた一年であったように思う。



家畜



家畜担当職員 ギルバート・ホガン

畜産の報告

2011 年はアジア学院、特に畜産部門にとって試練の一年でした。3 月 11 日の地震は分娩舎と肥育舎として使用しているデンマーク式豚舎に重大な被害をもたらしました。授乳期間中の母豚を中に残したまま一つの分娩房が崩壊しました。豚舎のいくつかの柱が切断され、豚房の壁も崩れ落ちました。舗装した床にいくつもの大きな亀裂が入り、地下の

給水パイプも損壊しました。市役所職員による検査により、すべての豚舎は危険であり、放棄するように申し伝えられました。また乳牛舎では搾乳器が圧力配管の損害により完全に停止しました。さらに養魚池では外壁に大きな亀裂が生じました。

豚の避難計画

この状況に対する対応として、すべての豚をデンマーク式豚舎から韓国式豚舎に移動させました。しかしながらすべての肥育豚に豚房をあてがうことは出来ませんでした。

急速 2 棟のビニールハウスを建て、仮設豚舎として利用しました。放射能混入の恐れから、あぜ草や野菜の家畜への給与を停止しました。さらに職員の外部被曝を防ぐため、家畜への給餌を一日一度に減らしました。研修は 3 ヶ月間、一時的に農村伝道神学校に場所を移し、この間、二人の畜産職員はアジア学院に勤務しました。職員は必要に応じてアジア学院と農村伝道神学校を往復しました。

乳牛の売却

新鮮な牧草の生産が難しいため、最終的に乳牛を売却することにしました。1 歳の子牛も処分し、一時的に乳牛部門を閉鎖することにしました。家畜への影響を減らすため、鶏舎

2011 年の主な農産物

米	9,100 kg / 225.6 a
大豆	2,300 kg / 192 a
黒大豆	200 kg / 58.4 a
じゃがいも	1,485 kg / 13 a
小麦	997 kg / 44 a
にんにく	202.4 kg / 6 a
たまねぎ	2,301 kg / 14 a
さつまいも	1,129 kg / 9 a
さといも	360 kg / 4 a
えごま	10 kg / 6 a
たまご	98310 個
豚肉	86 頭

アジア学院で育ったコイは高い放射能で廃棄処分になりました。



と牛舎の周囲の放射能が混入した落ち葉を集めました。養魚池は修理した上で養魚を継続しました。代替の魚の餌として職員がおからと米ぬか、魚を使って蛆虫を育てました。蛆虫は炒めてから他の飼料成分と混ぜて魚の餌にしました。この方法の採用により、高価な魚粉を買う必要はなくなりました。

放射能の測定

安全面の理由から、敷地内の放射能レベルを定期的に測定するためガイガーカウンターを購入しました。さらに三人の職員（二人は農場、一人は事務）と一人の学生が外

部被曝の累積を測定するためガラスバッジを装着しました。安全な食べ物だけを摂取するため、野菜、肉、米、卵などの学院の農産物を送付し放射能レベルを測定しました。日本キリスト教協議会よりガンマ線スペクトロメータの寄付があり、2011年11月に那須セミナーハウスに設置しました。この装置を利用して、放射能の混入の可能性のあるあらゆる種類の食物などを測定し始めました。この装置は家畜の加工品や農場の産品を検査するのに非常に役立ちました。

豚の肥育

さまざまな変更は畜産部門に大きな影響をもたらしました。販売と学院内での消費のため100頭を出荷する計画でしたが、最終的に72頭にとどまりました。三つの豚肉購買グループが放射能の恐れから購入を停止しましたが、同時に複数の新規顧客が豚肉の購入を始めました。給餌を一日一回に減らしたため肉質は一時的に低下しましたが、一日二回に戻してから肉質は改善しました。デンマーク式豚舎は放棄する予定でしたが、継続して利用する必要性が生じました。放射能が仮設豚舎の発酵床で検出されたため、17頭の豚を大修理の後デンマーク式豚舎に戻しました。その後、デンマーク式豚舎でコクシジウムの流行が発生し、15頭の子豚を失いました。

養鶏

養鶏部門では400羽の雛を導入する予定でしたが、最終的にその半分にとどまりました。

卵の生産に大きな変化はなく、2010年度と同程度の卵を得ることが出来ました。ベラルーシの基準に従って、アジア学院独自に食品の放射能基準値を1キロあたり37ベクレルに決めました。97キロの魚から1キロあたり約70ベクレルの放射能が検出されたため、残念ながら食用に供することが出来ませんでした。畜産の実技トレーニングは、カリキュラムの後半に学生がアジア学院に戻ってくるまで行うことが出来ませんでした。その際、集中的に畜産に焦点をあてることで、学生は豚の体重測定や飼料要求量の計算などの技術を速やかに学ぶことが出来ました。子豚の去勢と同様に発酵飼料と濃厚飼料双方の配合も行うことが出来るようになりました。





給食



給食担当 竹内 和彦

2011年は大地震と福島第一原発事故のため、通常と大きく異なる年となった。とりわけ放射性物質は農場に直接的な被害をもたらし、私たちが栽培できる作物の種類および収量が限定されてしまった。自給自足の割合は減少し、キッチンでの最優先事項としては、必要な食糧を確保することが最優先となった。幸運にも、アジア学院の支援者の方が、西日本で収穫された有機栽培の野菜をご提供くださった。また、様々な方からたくさんの食糧をご寄付をいただいた。肉と卵については、慎重に放射線量を計測した上で消費し、外部からいただいたものについても同様に対処した。牛乳といくつかの収穫物の自給は完全に見合わせるようになった。

この状況下において、物質的にも精神的にもご支援くださった方々に対し、心より感謝申し上げます。また、安全な食糧を提供するため、農場ではあらゆる手段を講じ最善を尽くしました。

二つめの課題は、一時的に教育機関としての機能を農伝（鶴川農村伝道神学校）に移動したことである。必要なキッチン用品を運

び入れた後、食事を賄うための様々な食材（米、肉、魚、野菜など）を、毎月2、3回のペースで西那須野キャンパスから移送することになった。キッチンとダイニングホールを農伝の職員・学生の方々と共有させていただくことにはお邪魔になるとの懸念があったが、楽しい交流の場となった。両校間では食生活の面で大小さまざまな差異があるにも関わらず、農伝の皆様からは調理と食事の場を共有できたことに対し、寛大にも感謝頂いた。

教育的側面に関しては、食事作りのための新しいグループ編成が実施された。各グループは3～4名で構成され、週の半分の調理を担当した。与えられた期間の中で新しい献立をつくる点で大きな効果があった。また、彼らが調理を担う上では適切な頻度であった。各学生からの個別の意見を反映させるため、3日という期間での献立構成を作成した。

時折、“学びの機会”と“調理のクオリティ”という2つの視点が錯綜することがあった（毎年のものである）。学生たちはしばしば、職員が調理する環境をコントロールし過ぎていると感じた。概して調理技術は良かったが、

学生たちに献立計画を任せることについていくつかの疑問が残った。今年度の調理担当者の陣容（職員、研究生、ボランティア）は大変に恵まれた年であった。よって、毎回の食事では皆が満足する料理が提供され、また通常ではありえないストレスの多い環境下であって、食という観点でコミュニティのモラルを維持することに貢献した。しかし、まさに、苦難の年、というひとことに尽きる年ではあった。また同時に、多くの素晴らしい出会いと経験を、交流や成長、調理を食事を通して得ることができた。2011年は、全く新しい視点から私たちのミッションを省みる機会を得た。



アジア学院の 復興



地震後の片付け

東日本大震災は、激しく ARI キャンパスを揺り動かしました。建物の歪みによって、窓ガラスは粉々になり、その場に立っているのがやっとでした。5 分間ほど経って揺れが止まりました。建物被害はありましたが、全員無事であったのが何よりでした。強い余震が、その後も続きました。

数週間のうちに 2 つの建物について、建物診断の専門家が主要な構造を調べ、以下の評価をしました。コイノニアハウスのフレームと基盤にはねじれが生じ、建物はもはや構造的に安全でないということでした。本館建物についても構造上の安全性の問題があるという指摘を受け、更に 4 月 11 日に起こったマグニチュード 7.1 の余震の後、状態はより悪くなりました。既存の豚舎についても、安全でないと言われました。これらの建物補修には、耐震構造への手立てなどを含めて考えると、建てかえるのと同じくらいの費用がかかることが分かりました。そのため、危険を指摘された建物については最小の補修をして 2011 年度の研修を実施し、全体として再建に向けた取り組みをすることになりました。本館は、2011 年 12 月に取り壊し、コイノニアハウスと豚舎は、2012 年中に取り壊すことになっています。

2011 年夏までに、包括的な再建計画が決められました。そのための見積り額は、総額 6 億 5000 万円になり、これに対して 2011 年度末までに集った寄付金は、約束された寄付金を含めると約 5 億 3000 万円になりました。この危機の中で皆様から溢れるばかりのご支援を頂き、感謝の喜びと共に危機を乗り越える力をいただきました。アジア学院の再建と、この災害から抜け出ることを可能にして下さった皆様に感謝を申し上げます。

主な復興計画

農業研修棟 2011 年 5 月

農業研修棟新築のための募金は 2008 年に始められ、2010 年 11 月に建築着工、2011 年 5 月に奉獻式を行いました。アジア学院が、地震直後に使用可能な新農業研修棟を持っていたことは幸いでした。

女子寮改修工事 2011 年 9 月

亀裂の補修、電気および配管システム、内部の改修工事実施。

管理棟 2011 年 12 月

新農業研修棟の 2 つの大きな部屋は、事務室と職員室に変わりました。当初一時的な措置として考えられていましたが、思ったよりも広いスペースがあり、その場所を改修して管理棟として利用するほうが、新しい建物を建てるよりも安上がりであることが分かり、すぐに改修工事を始めました。

管理棟増築 2011 年 4 月

農業研修棟の二つの部屋は事務室、職員室として十分でしたが、それ以外に玄関としてのスペース、印刷室、小会議室、トイレなどが必要となり、それらを備えた建物を管理棟に隣接して増築しました。

コイノニアハウス 2012 年 9 月

食堂と台所を含む平屋建ての木造建築です。太陽熱を利用して食堂床にお湯の循環パイプが埋設され、台所ではそれをお湯として使えるようになっています。

教室棟 2012 年 9 月

平屋建ての木造建築で、通路でコイノニアハウスとつながっていますが、ここには教室・図書室・会議室があります。

豚舎 2013 年 3 月

豚舎は、韓国式豚舎と、バイオガスシステムに連結しているデンマーク式豚舎を作ります。地震後、構造上危険と判断されている豚舎は取り壊します。

男子寮 2013 年 6 月

男子寮は、広範囲な既存建物の劣化と地震被災による損傷及び耐震工事を考えると改修費用が高くなり、現在地に新築することになりました。新男子寮建築は、2012 年度研修終了後に始める予定です。

チャペル 2013 年 6 月

古民家をリフォームしてチャペル建設を計画しています。

新しい農業研修棟と管理棟(2012 年現在)



アジア学院と放射能

地震によって併発した多くのことの中で、最も人々を失望させた混乱させたものは放射性セシウムによる大地の汚染でありました。30年以上に亘る有機農業の実践の結果、アジア学院の農地は健康で、肥沃で、美しい土となっていました。その土こそが豊かな野菜、果物、穀物を育み、アジア学院コミュニティを養っていました。この土の上で汗するということがアジア学院の多様な人間をひとつにし、また「共に生きるために」という私達のモットーを生きたものにするための確固たる手段となっていました。ですからその土が脅かされた時、それはまさにアジア学院の心臓部を直撃したといっても過言ではありませんでした。

地震から1年が経ち、その間多くの学びと発見がありました。職員は混乱の極みから徐々に這い出し、今や放射性物質汚染に関して地元では信頼の置かれる存在となりました。「回

田んぼ土のサンプルを集まる



復するには十分に低いレベルだが、無視するには高い」というのが学院内の放射性物質の程度を最も簡潔に示す言い方だと思います。除染はとてども気落ちする長期に亘る作業ですが、アジア学院は厳格にまた情熱をもってそれに立ち向かい、またこれからも立ち向かい続けます。そしてその決心こそが大地を蘇らせると信じています。

2011年度に中止した農作業

- ・合鴨と稲作の複合農業
- ・魚と稲作の複合農業
- ・養魚池の周りのブラックベリー栽培
- ・しいたけ栽培
- ・育牛
- ・家畜飼料としての雑草・野草の給餌
- ・豚への赤土の給餌(ミネラル補給)
- ・サイレージのためのとうもろこし栽培
- ・家畜舎の床材としてのチップの製作
- ・にんじんジュース、しょうゆ、味噌の生産

実施された放射能対策

- ・積算被ばく線量を測るガラスバッジを職員3名が着用
- ・全ての学院の農作物の放射線量を定期的に計測
- ・人間、家畜による放射性セシウムを多く含む食物、植物の摂取中止、またコンポストの材料として使用中止
- ・放射性セシウムの植物の根から吸い上げを抑制するために畑の汚染土を深耕(20~30cm)
- ・植物からの放射性核種の吸い上げを抑制するために酸性土にカリウムを散布
- ・堆肥の材料のうち、汚染物質(枯葉、雑草、枝)と非汚染物質(家畜の糞、残飯、オカラ)を分別
- ・汚染された糞、堆肥、木灰などの畑への散布



新しい農業研修棟の床から放射性部質に汚染されたコンクリートを削る

の中止

- ・キャンパス内での木灰などの高放射性汚染物質の扱い、廃棄に十分気をつける
- ・家畜への非汚染飼料と非汚染粘土の給餌
- ・養魚池の徹底した掃除と新鮮な水の再補充
- ・ファイトレメディエーション(植物による環境修復)ときれいな植物油の生産を目的とした1.92ヘクタールの大豆畑の耕作。これは後の「グリーン・オイル・プロジェクト」のきっかけとなる。
- ・野菜栽培のために表土を10cm取り除いて

2011年度のアジア学院における放射能の影響

放射能レベルの例

空間—原発事故直後のこの地域の放射能のレベルは約1.7 μ Sv/時でした。しかし3月末には0.5 μ Sv/時に下がり、最終的には0.2-0.3 μ Sv/時までになりました。原発事故前の数値は0.03 μ Sv/時でした。

水—0 Bq/kg

耕作土壌—2,000-3,000 Bq/kg

家畜飼料(アジア学院基準: 50 Bq/kg以下)

実測値 0.0-6.2 Bq/kg

食糧(アジア学院基準: 37 Bq/kg)

ひんじんの	米	3 Bq/kg
	にんじん	3 Bq/kg
	卵	1-3 Bq/kg
	じゃがいも	8 Bq/kg
	なす	11 Bq/kg
高ひんじんの	豚肉	2-12 Bq/kg
	しいたけ	415 Bq/kg
	キイチゴ	124 Bq/kg
	魚(草魚)	79 Bq/kg
	小麦	51 Bq/kg



からビニールハウスを組み立て、取り除いた土を 1m の深さに掘った穴に埋め、掘った土を上を持ってきて天地返しを行う。

- ・鶏舎の床土を 30cm 削る
- ・農業研修棟の床の工事—地震の発生時、新農業研修棟は建築中だった。そのため基礎部分が外気や雨に晒されていて汚染された。床は高压洗浄で洗浄したが効果がなかったので、表面を削り、削りカス(セメント)を取り除いた。最終的に約 3cm のコンクリートを表面に塗り直した。これにより床の表面の放射線量は 0.10 μ Sv/時まで下がり、他の建物の室内の空間線量とほぼ同じになった。

年間被曝量 1 m/Sv

一般の人間が浴びても安全だと言われる被ばく量は年間 1 m/Sv であり、これは福島第一原発事故前に日本政府が設置した基準です。事故の後、このレベルは年間 20 m/Sv まで引

き上げられました。アジア学院は学院に来る全ての人の健康と安全を厳格に配慮し、年間 1 m/Sv 以下の被ばく量に納まる期間においてのみ学生やボランティアを招くこととしました。この理由から 2011 年度は以下の処置をしました。(1) 研修を 7 週間短縮し、その半分の期間は別の場所(東京町田市)で研修を行った。(2) 数々の除染活動を実施した。(3) アジア学院独自の食料の放射線の基準を設けそれを 37 Bq/kg (米に関しては 20 Bq/kg、水は 0 Bq/kg) とした。政府の食料の基準は 2011 年度は 500 Bq/kg であった。

2012 年度の研修は、全期間アジア学院で行うこととし、年間被ばく量が 1 m/Sv を超えない範囲でボランティアを受け入れることにしました。

ベクレルセンター

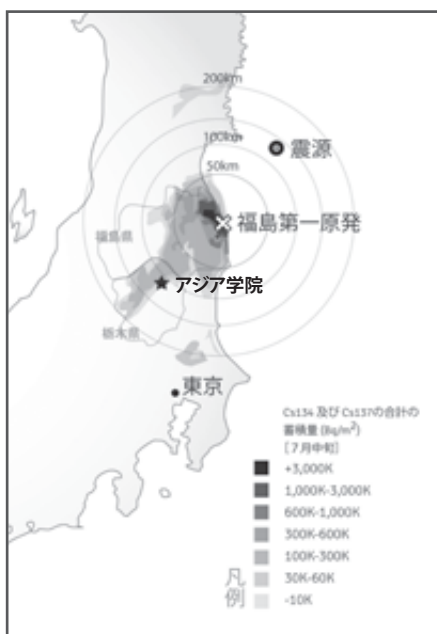
アジア学院は日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室(JEDRO)からガンマ・スペクトロメーターの寄贈を受けました。この放射能測定機は大変高価でまた精密なものです。そして農業をする私達にとってこの測定機は必要不可欠のものとなっています。この計測機がこの地域の他の農業者、また生活者が強く求めているデータを供給できると認識して、アジア学院はこの計測機を一般に開かれたものにすることにしました。そしてボランティアの協力を得ながら、2012 年 1 月 10 日に隣接する那須セミナーハウス内に「ABC・アジア学院

ベクレルセンター」オープンしました。これまで約 350 人の方が訪れ、約 500 検体が計測されました。持ち込まれた検体の放射能値は食品で 10-20 Bq/kg、土 2,000 Bq/kg、水 0Bq/kg などで平均して低く出しています。

市民運動「那須を希望の砦にするプロジェクト」

福島第一原発の事故後、北日本では放射能汚染の問題を地域で積極的に取り上げていく市民の運動があちこちに生まれました。藤村靖之博士(発明家、大学教授、工学博士)が那須町でこのような市民運動を始めた時、アジア学院はそれに参加することを躊躇しませんでした。この「那須を希望の砦にするプロジェクト」と名付けられた運動は以下の様な活動を行なっています。(1) 原発の現状と栃木北部における放射能の影響について啓蒙する (2) この地域の放射能の実態を把握する(計測と分析) (3) 除染活動をとりまとめ、実施する (4) 地方行政と連携。

アジア学院は、アジア学院ベクレルセンターの開設と合わせ、この「那須を希望の砦にするプロジェクト」のメンバーのうち地元那須塩原市、大田原市在住の市民によって始められた「那須野が原の放射能汚染を考える住民の会」(NRARP)に協力しています。NRARP のメンバーはアジア学院ベクレルセンターの計測ボランティアの中心メンバーです。



◀ 文部化学省による航空機モニタリングの結果(地表面の沈着したセシウム 134、137 の濃度)

シーベルト (Sv)
放射線物質の人体への影響を示す単位
1,000 マイクロシーベルト (μ Sv) =
1 ミリシーベルト (mSv)
1,000 ミリシーベルト = 1 シーベルト

ベクレル (Bq)
放射線物質が放射線を出す能力を表わす単位

アジア学院 後援会報告



アジア学院後援会事務局長 佐久間郁

震災後、日本の多くの方が様々な悲しみ、変化を体験しました。私たちアジア学院後援会も支援者の皆さまの存在に励まされ、支えられる1年となりました。心より感謝申し上げます。アジア学院の支援の輪は目には見えませんが、それがつながり、新たな力を生み、前進することができます。どのような状況にあっても、農村リーダーと共に歩んできたこの歩みを続けていきたいと心新たにしています。

① 新規会員勧誘活動

各種イベントや西日本出張報告会においての勧誘やチラシの配布などによって、70名の新規個人会員が後援会に入会して下さった。

② ARISA 西日本キャラバンの実施

2011年11月23日～12月8日

今回はウェスレー財団の後援で開催された。

研究科生のミアタ・ロバーツ・サーリーフさんが同行し、「リベリア紛争を乗り越えた女性たち」と題して各地でトークセッションを行った。訪問団体は計32団体、新規会員4名、他35名がメーリングリストやニュースレターのお試しコースに参加してくださり、実り多いキャラバンとなった。

③ 卒業生を訪ねる旅（スタディツアー）の実施

2012年1月24日～2月1日

参加者8名、訪問地：カンボジア

カンボジアで活動する卒業生は、カンボジア人5名、バングラデシュ人1名、インド人1名の計7名。訪問中に初めての卒業生同窓会（ARIGA）が開催され（上右の写真）、それぞれの活動紹介や意見交換が行なわれた。その他にも、卒業生のプロジェクト地訪

問やホームステイなど行なわれ、卒業生たちの直面している課題やアジア学院の研修の成果を学び、体験することができた。

《参加者の声》

「カンボジアは内戦の傷跡がまだ深く、海外の援助なしには立ち行かないと聞いた。（略）今回の旅で出会ったアジア学院の卒業生は、その中で持続可能な農業を各々の場所で活かそうとがんばっていた。これからも、人間にとって根源的に大切なものは何なのか、その問いを問いながらカンボジアの中でがんばってほしいと思う。アジア学院が育てている種は、その人間らしさを育てる種なのだ。今回の旅でも痛感させられた。（まぶね教会牧師 石井智恵美）」

④ 口座振替制度・オンライン寄付の導入

2011年9月より、指定の口座より自動振替のできる制度を導入した。51名の方が（2012年3月現在）が利用してくださっている。オンライン寄付も同時に開始され、今後より多くの方にご利用いただける様、広報等に力を入れたい。



2011年度アジア学院後援会収支報告（単位：円）

収入の部		支出の部	
会費収入	5,097,000円	アジア学院への援助金	15,592,965円
特別	788,000円	運営費	1,120,406円
維持	4,263,000円	広報費	264,000円
賛助	46,000円	通信費	532,985円
一般寄付	8,285,454円	事務費	21,551円
事業収入	3,354,665円	手数料	261,657円
書き損じ	1,603,042円	その他	40,213円
一品・HTC	470,171円	事業経費	700,454円
その他	1,281,452円	次年度への繰越	712,931円
雑収入	26円		
預かり金	28,000円		
繰越金	1,361,611円		
合計	18,126,756円	合計	18,126,756円

補助活動部では、自助努力による農村指導者養成事業の資金創出を目的とし、様々な活動を行っています。販売部では、年間を通してアジア学院農場あるいは卒業生が関わるプロジェクトから得られる農作物を、発酵食品や嗜好品に加工し、支援者の方々を含め広く一般の方に提供しています。

しかしながら震災復興が優先され食品加工要員を確保できなかったため、被災時より5月末日までは販売活動が休止となりました。

販売活動開始後は、放射能被ばくの心配があったため、加工食品の原料には震災以前のものを使用すること、また卵や豚肉といった生鮮品については、含有される放射能値は37Bq/kg以下のもののみを利用するという指針を徹底しました。

また、アジア学院での生活や農作業を体験する目的で訪問されるワーキングビジターやワークキャンパーについては、放射能を懸

念するという理由により、訪問者数が激減しました。

一方、那須セミナーハウスでは、地元の方たちとの交流を視野に入れたフリーマーケットや古本市などのイベントを数回開催しました。そこではアジア学院での日頃の活動や放射能対策などについて積極的に広報しました。さらに、放射能汚染や内部被爆についてより理解を深めるため、専門家を招聘し、一般の方を対象にした勉強会等を7回にわたって開催しました。



2011年にアジア学院で行われた放射能勉強会と参加者人数

06月30日	30名
「いまここにいるということ」	
伴英幸（原子力資料情報室共同代表）	
07月20日	40名
「放射能と体と自分」	
崎山比早子（高木学校）	
08月11日	70名
「映画：子どもを守れ」	
藤本幸久	
09月07日	90名
「チェルノブイリからの学び」	
河田昌東（チェルノブイリ救援・中部）	
09月27日	20名
「飯館村の自然農家 村上真平さんを迎えて」	
村上真平	
12月06日	300名
「放射能汚染のリスクを自分で考える」	
今中哲二（京都大学原子炉実験所）	

卒業生ネットワーク報告

学生選考・卒業生ネットワーク担当 中村朱里

2011年 卒業生同窓会

2011年度の卒業生同窓会は下記の国で開催されました。

第3回ARIGA（同窓会）ネパール年次総会

2012年2月18日

ARIGA ネパールが同窓会を開催し、アジア学院職員の壁谷早苗が参加しました。また、卒業生、評議員、ボランティア、ゲスト、そしてアジア学院学生応募候補者、総勢19名が参加しました。また、壁谷が卒業生の活動を把握する為に、ネパールにて数名の卒業生を訪問しました。

第2回ARUGA（同窓会）フィリピン全国集会

2012年2月22日～24日

2011年度の日本人卒業生である木戸康智

が、インターンシップ・プログラムでフィリピン滞在中に参加しました。また、27名のフィリピン人卒業生がミンダナオにて参加しました。

第1回ARIGA（同窓会）カンボジア

2012年2月28日

卒業生6名とゲストが参加し、ARIGAカンボジアの初めての同窓会が開催されました。日本からも、職員2名とその他日本人8名から成るARISAカンボジア・スタディーツアーの参加者が参加しました。

この同窓会以前には、非公式な会合が2011年7月24日に開催されており、6名の卒業生と職員の佐久間郁が集まりました。

東日本大震災における卒業生の支援

卒業生ネットワーク部門におけるもう一つの注目すべき経験は、3月11日の震災における卒業生からの支援でした。卒業生からの数々のメッセージや祈りは、この危機に立ち向かい、乗り越えるよう、私たちを励ましてくれました。また、個人の卒業生や同窓会の中には、祈祷集会や募金集め

支援者団体一覧

国内（順不同、敬称略・10万円以上）

【教会関係】

アシュラムセンター
 (カ) 藤沢教会
 (カ) 藤沢教会ネットワークともに
 (カ) 中央協議会カリタスジャパン
 (カ) 麴町教会
 (カ) 大田原教会
 (キ) 南浦和教会
 (キ) 柏木教会
 (キ) 札幌琴似教会
 (キ) 鶴見教会
 (キ) 栃木教会
 (キ) 宇都宮松原教会
 (教) 経堂緑岡教会
 (教) 甲東教会
 (教) 西那須野教会
 (教) 翠ヶ丘教会
 (教) 代々木上原教会
 (教) 阿佐ヶ谷教会
 (教) 希望ヶ丘教会
 (教) 早稲田教会
 (教) ひばりが丘教会
 (教) ロゴス教会
 (教) 中目黒教会
 (教) 遠州栄光教会
 (教) 宇都宮上町教会
 (教) 生田教会
 (教) 田園調布教会
 (教) 清水ヶ丘教会
 (教) 草津教会
 (聖) 東京聖三一教会
 (聖) 聖アンデレ教会
 (聖) 聖オルバン教会
 (聖) 聖テモテ奉仕奨学金
 (聖) 東京テモテ教会奉仕会

(聖) 東京テモテ教会婦人会
 (聖) 川越キリスト教会
 (福ル) むさしの教会
 (福ル) 保谷教会
 (NCCJ) 女性委員会
 (NCCJ) 国際わかちあい委員会
 (財) とちぎYMCA
 日本聖公会 東京教区事務所
 国際基督教大学教会
 在日大韓基督教会総会
 在日本インターボード宣教師社団
 東京ユニオンチャーチ
 西東京ユニオンチャーチ
 神戸ユニオンチャーチ
 横浜ユニオンチャーチ
 カノッサ修道女会
 聖心会（あけの星修道院）
 クリスマンパートナーズ
 全国教会婦人会連合
 ディアコニア委員会
 仙川キリスト教会
 日本ナザレン教団
 湘南教会
 福音伝道教団鹿沼キリスト教会
 援助修道会

【学校】

青山学院（宗教センター）
 青山学院中高等部
 宇都宮北高等学校
 共愛学園中学校・高等学校
 敬和学園高等学校
 国際基督教大学
 さつき幼稚園
 聖隷学園

聖隷キリストファー中・高等学校
 女子聖学院中学高等学校
 東洋英和女学院中高部
 明治学院
 明治学院中学校・東村山高校
 立教女学院
 横浜共立学園
 女子学院宗教部
 横須賀学院宗教部
 上智学院 上智大学カトリックセンター
 宮城学院中学高校・宗教部
 関東学院六浦高等学校
 東洋英和幼稚園
 恵泉女学園大学キリスト教センター

【諸団体】

(株) サンケイスーパー
 (株) 鷹ネットワーク
 (財) あしぎん国際交流財団
 アジア婦人友好会
 アジア学院後援会（ARISA）
 アメリカンスクール・イン・ジャパン
 おひさま かわて医院
 サマリヤ会
 ワールドファミリーファンド
 わかちあいプロジェクト
 三菱 UFJ 国際財団
 全国友の会
 全国友の会 中央部
 全国友の会復興財団
 松戸友の会
 横浜友の会
 浦和友の会
 土浦友の会
 国際協力 NGO センター NGO サ
 ポーター基金
 東京霞ヶ関ライオンズクラブ
 立正佼成会 那須教会

OGC 合唱団 (ICU)
 東京南ロータリークラブ
 新倉電業 (株)
 えん 21
 (株) 荒戸産業
 ミヨシ石鹸 (株)
 日有研災害支援の会
 (財) ウェスレー・ファンデーション
 かなや動物病院
 WE21 ジャパン・さかえ
 (株) こぐま社
 井上眼科医院
 日下教育研究所
 富士ゼロックス (株)

【奨学金】

(カ) 聖コロンバ会
 (カ) 聖心会（あけの星修道院）
 (公益信託) 久保田豊基金
 (財) アジア農村交流協会
 (財) ロータリー米山記念奨学会
 大阪コミュニティ財団
 (財) 新倉会
 在日アメリカン・スクール水泳チーム
 日本福音ルーテル社団 (JELA)
 日本基督教団国際関係委員会
 日本学生支援機構 (JASSO)
 東京アメリカンクラブ
 栃木県経済同友会

【災害復興募金】

在日アメリカン・スクール水泳チーム
 東京ユニオンチャーチ
 東日本大震災「ルーテル教会救援」
 パートナーズインターナショナル・ジャパン
 西東京ユニオンチャーチ

国外

【教会関係】

米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
 カナダ合同教会
 合同メソジスト教会救援委員会
 合同メソジスト教会世界宣教 (GBGM)

【諸団体】

北米アジア学院後援会 (AFARI)
 オランダ・アジア学院支援者会

【奨学金】

United Methodist Women
 米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
 The Hartstra Foundation (オランダ)
 合同福音主義宣教会
 合同メソジスト教会世界宣教 (GBGM)
 Episcopal Relief and Development (米国聖公会)
 アメリカ福音ルーテル教会
 ガルフ・ロータリークラブ (カナダ)
 英国メソジスト教会
 アメリカ合衆国長老教会

【災害復興募金】

北米アジア学院後援会 (AFARI)
 Church of the Brethren
 Church Community Foundation
 Diakonia Katastrophenhilfen (ドイツ)
 南西ドイツ宣教会 (EMS)
 ガルフ・ロータリークラブ (カナダ)
 アメリカ福音ルーテル教会
 Episcopal Relief and Development (米国聖公会)
 The Hartstra Foundation (オランダ)
 日本ナザレン教団国際援助委員会
 カナダ合同教会
 米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教
 合同メソジスト教会救援委員会 (UMCOR)
 エジンバラ韓国長老教会
 Mayfield Salisbury Parish (Edinburgh) Church of
 Scotland (スコットランド)
 The Brunöhler family

【40周年記念募金】

北米アジア学院後援会 (AFARI)
 カナダ合同教会

農村伝道神学校高柳校長 (右) とアジア学院長の天津校長 (左)



アジア学院 コミュニティー メンバー



職員

【名誉学院長】

高見敏弘

【専任職員】

大津 健一	校長
荒川 朋子	事務局長・副校長
荒川 治	農場長
大柳 由紀子	教務主任
バン・ヒョンウック	共同体生活
ティモシー・B・アパウ	共同体生活
ジョナサン・マッカーリー	共同体生活
スティーブン・カッティング	国際協力
ギルバート・ホガング	畜産
壁谷 早苗	畜産
山口 敦史	野菜・作物
大谷 崇(12月～)	畜産
竹内 和彦(2月まで)	給食
中村 朱里	学生選考
佐久間 郁	後援会事務局長
佐藤 裕美	販売・庶務
藤嶋 トーマス 逸生	広報
山下 崇	那須セミナーハウス主事

【非常勤職員】

福島 昌代	食品加工
君嶋 満恵	会計
田仲 順子	図書
直井 由美子(2月～)	給食

【嘱託職員】

遠藤 抱一	法人財務室長
-------	--------

ボランティア

【長期ボランティア】

レイチェル・ブラー(アメリカ)	農場
フラウケ・ギア(ドイツ)	学生選考
ニコル・グルーム	農場
フランツ・ヒミックホーフェン(ドイツ)	学生選考
ハリルル・ラハマン(バングラデシュ)	給食
鎌田 幸子	給食
佐久間 力	農場
マクニコル・ピータ・良治	PC管理
杉田 美砂子	農場

【通いのボランティア】

伏見 卓	営繕
戸川 勝安	営繕
小野崎 仁	営繕、農場
石山 幸一	農場
戸川 昌子	食品加工
高村 京子	給食、食品加工、総務
鈴木 由美	データベース管理
長瀬 みか	図書
宮下 保	営繕、農場

鄭 鎮海	総務、プティーク
榎 尚子	補助活動
マッカーリー里美	給食、食品加工
伊藤 正	農場
加藤 篤彦	営繕
佐原 市郎	事務
後藤 正昭	農場
木村 栄進	農場
久保 瞳	給食
村上 和子	給食
秋元 康知	食品加工
直井 由美子	給食
青山 登志彦	車輛修繕
安田 修平	農場

【発送ボランティア】

栃木教会
那須友の会
間庭 文子
菊池 ふじ
藤田 カツノ
小倉 恭子

【在宅ボランティア】

芝田 沙南
榎 尚子
平 小野花

役員・評議員

【理事長】

丹羽 章	獨協医科大学名誉教授 社会福祉法人一麦福祉会理事長
------	------------------------------

【副理事長】

福田 龍介	東京ユニオン チャーチ役員
-------	---------------

【理事】

大津 健一	アジア学院農村指導者養成専門学校校長
遠藤 抱一	法人財務室長
久世 了	(学) 明治学院学院長
山田 正	元三井不動産(株)専務取締役
星野 正興	日本基督教団松崎教会牧師
佐藤 範明	読売新聞記者・アジア学院後援会会長
田坂 興亜	元アジア学院理事長・校長
丹羽 輝子	元(学) 東洋英和女学院講師

【監事】

船津 祥	(財)とちぎYMCA理事長
原田 時近	(株)ナスハウス工業代表取締役

【評議員】

丹羽 章	獨協医科大学名誉教授、社会福祉法人一麦福祉会理事長
福田 龍介	東京ユニオン チャーチ役員
久世 了	(学) 明治学院学院長
星野 正興	日本基督教団松崎教会牧師
山田 正	元三井不動産(株)専務取締役
山根 正彦	(学) 香川栄養学園理事・総務部長
大庭 セイラ	在日本インターボード宣教師社団代表理事
菊地 功	カトリック新潟司教区司教
植田 仁太郎	前・日本聖公会東京教区主教
福本 光夫	(学) 西那須野学園 西那須野幼稚園園長
宮崎 幸雄	(財) 日本YMCA同盟名誉主事
山本 俊正	(学) 関西学院大学教員
李 秀夫	(株) インテック代表取締役
菅野 勝之	日本基督教団西那須野教会牧師
石川 宗朗	アジア学院卒業生 霜里農場
巖 泰成	在韓国 松鶴監理教会牧師
長嶋 清	元アジア学院職員
荒川 朋子	アジア農村指導者養成専門学校副校長・事務局長
遠藤 抱一	法人財務室長
荒川 治	アジア学院職員
スティーブン・カッティング	アジア学院職員

会計報告

消費収支計算書

2011年4月1日～2012年3月31日

(単位：円)

消費収入の部	2011年予算	2011年決算	2012年予算
学生生徒等納付金 (*1)	23,152,000	23,264,689	32,207,500
授業料	2,022,000	2,082,000	3,848,000
入学金	162,000	166,000	244,000
食事費	465,000	481,000	1,032,000
施設設備資金	465,000	481,000	1,032,000
国内個人学費指定寄付金	0	0	0
国内団体学費指定寄付金	8,960,000	8,960,000	12,608,000
海外個人学費指定寄付金	0	0	0
海外団体学費指定寄付金	10,619,000	10,618,873	12,621,000
渡航費	459,000	475,816	822,500
手数料	20,000	30,000	22,000
寄付金	422,830,000	358,873,459	250,900,000
国内国外一般寄付金	31,211,000	38,635,834	24,900,000
アジア学院後援会	15,000,000	15,607,965	15,000,000
40周年記念事業特別寄付金	5,319,000	5,329,431	1,000,000
特別寄付金	371,300,000	296,475,729	210,000,000
(内災害復旧特別寄付金)	(330,000,000)	(254,145,729)	(200,000,000)
補助金 (*2)	3,180,000	3,180,000	2,480,000
資産運用収入	1,515,000	1,956,915	1,650,000
受取利息・配当金	15,000	94,715	50,000
施設設備利用料	1,500,000	1,862,200	1,600,000
補助活動収入 (*3)	15,010,000	17,080,254	20,028,000
貯蔵品振替差額	0	913,891	0
雑収入	1,873,000	1,939,701	1,850,000
帰属収入合計	467,580,000	407,238,909	309,137,500
基本金組入合計	-25,514,806	-119,340,684	0
消費収入の部合計	442,065,194	287,898,225	309,137,500
消費支出の部 (*4)			
人件費	71,476,606	68,186,975	65,500,000
教育研究費	12,235,000	13,271,860	20,220,000
管理経費	73,161,080	90,411,234	49,833,080
(内災害復旧費)	(39,800,000)	(59,984,871)	(20,000,000)
支払い利息	1,500,000	2,061,630	1,588,000
資産処分差額	565,000	7,304,663	0
予備費	5,000,000	0	5,000,000
消費支出の部合計	163,937,686	181,236,362	142,141,080
当年度消費収入超過額	278,127,508	106,661,863	166,996,420
前年度繰り越し消費支出超過額	(277,153,776)	277,153,776	723,732
翌年度繰り越し消費収入超過額	973,732		167,720,152
翌年度繰り越し消費支出超過額		170,491,913	

【注記】

(*1) 学生納付金には次のものが含まれる。

入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの。

食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの。

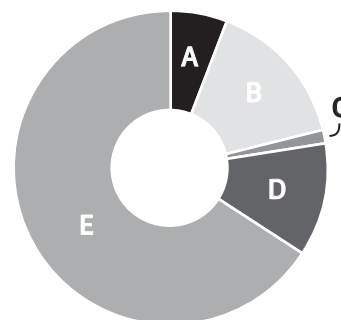
施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの。

(*2) 国および地方自治体からの補助金ではなく、特定のプロジェクト実施に対し関連団体によって助成された助成金。

(*3) 農産物、加工食品、民芸品等の販売、セミナー開催等による収入。

(*4) 2011年度消費支出の内訳については、右頁を参照。

寄付金の種類別割合



- A) 学生生徒納付金 6.0%
- B) 一般寄附・特別寄付金 15.2%
- C) 40周年記念事業特別寄付金 1.4%
- D) 特別寄付金 11.8%
- E) 震災復旧特別寄付金 65.6%

学院内の流通

学院の農場の生産物は補助活動として販売されるほか、学院の食材及び加工食品の材料としても用いられている。主な農産物の生産量は、米 5.5 トン、小麦粉 400kg、芋類が 2.1 トン、豆類 300kg、タマネギとニンニクで 2 トン、肉類 727kg、卵 1.1 万個である。これらの農産物の2011年度

の総額は約 556 万円である。この総額は昨年度比で 60% 減であるが、これは福島第一原発事故の放射能漏れによって農業生産が大幅に制限にされたためである。不足した食材を補うために特に大阪愛農食品センターより総額約 43 万円の野菜を購入し、この費用は篤志により寄付された。

貸借対照表

2012年3月31日現在

(単位：円)

資産の部	前年度末	本年度末
固定資産	417,721,824	592,771,401
有形固定資産	338,616,346	486,601,895
（内建物仮勘定）	113,763,004	182,603,520
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
有価証券	64,930	64,930
預託金	4,680	4,680
退職金引当特定預金		3,000,000
40周年記念事業特定預金	6,616,779	485,834
奨学基金特定預金	72,103,489	72,298,462
奨学金特定預金		30,000,000
流動資産	60,130,868	83,673,634
現金預金	50,394,206	61,497,405
未収入金	518,760	1,170,760
貯蔵品	6,021,558	6,935,449
販売用品	1,140,368	1,389,794
有価証券		9,560,433
前払金	1,784,107	3,017,253
仮払金	271,869	102,540
資産の部合計	477,852,692	676,445,035
負債の部		
固定負債	98,390,000	113,940,000
長期借入金	71,050,000	70,050,000
学校債	27,340,000	43,890,000
流動負債	140,548,313	97,588,109
短期借入金	75,500,000	67,000,000
学校債	50,640,000	20,260,000
未払金	4,800,343	1,788,666
未払金消費税	462,300	316,700
前受金	8,561,497	7,561,758
預り金	584,173	660,985
仮受金	- 0	- 0
負債の部合計	238,938,313	211,528,109
基本金の部		
基本金の部合計	516,068,155	635,408,839
消費収支差額の部		
翌年度繰越消費収入超過額	-277,153,776	-170,491,913
内今年度消費収入超過額		106,661,863
負債の部・基本金の部・ 及び消費収支差額の部合計	477,852,692	676,445,035

左頁の注記の続き

(※6) 2011年度の消費支出の内訳

人件費支出	68,186,975
教員人件費	28,134,904
職員及び嘱託人件費	34,192,396
その他人件費	5,859,675
教育研究費	13,271,860
奨学費	2,720,200
見学費	1,744,047
実験実習費	3,969,248
学生交通費	39,743
学生渡航費	2,421,170
教材費	154,269
研究費	126,362
学生厚生費	301,433
職員研修費	139,120
卒業生同窓会支援費	20,000
プロジェクト費	51,500
特別講師費	451,860
光熱水費	597,606
雑費	500,000
管理経費	90,411,234
消耗品費	507,256
光熱水費	2,538,096
旅費交通費	674,667
募金費	1,775,873
車両燃料費	1,080,177
福利費	20,668
通信運搬費	735,574
事務費	5,490,984
出版物費	571,715
車両修繕費	2,470,749
営繕費	499,227
損害保険料	196,440
賃借料	1,371,185
公租公課	416,000
諸会費	185,624
会議費	362,923
報酬委託手数料	1,113,582
補助活動収入原価	1,428,420
行事費	63,180
渉外費	132,900
雑費・災害復旧費	59,984,871
減価償却費	8,791,123
借入金等利息支出	2,061,630
借入金利息支出	1,356,930
学校債利息支出	704,700
消費支出の部合計	181,236,362

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第7条の規定に基づき、
2011年度の事業および会計の状況について監査した結果、
適性に執行されたものと認めます。

2012年度5月8日
学校法人 アジア学院

監事： 

監事： 

2011年度卒業生



カメルーン

**アタバ・ジュード・
フォンサ**

きのご栽培指導研究
センター



ミクロネシア連邦

**グローリアン・
ダイオボイ**

オウワキリスト教高校・
大学



ハイチ

**ジョン・ゴントラン・
デルグラス**

ハイチ・メソジスト教会



インド

**スイビ・マッシュー・
ペリヤコッティル**

ワヤナド自然資源
保護協会



インド

クレメント・ラジャ

聖ジョアキム&アン教会
シバガンガイ・
カトリック教区



インドネシア

サムスル・アスィナル

農地改革連合



インドネシア

**リディア・
ホットマイダ・ナイバホ**

ベトラサ基金



インドネシア

**リリン・スーリヤンティ・
ゼンドラトゥ**

ニース・コミュニティ
教会



日本

木戸 康智



ミャンマー

**ジェームズ・サン・
オウン**

ミャンマー・
ルーテル教会



ミャンマー

ペン・ガイ

カンベレッ市バプテスト
連盟



ミャンマー

ビャー・ミャー

ケーチョーボ
伝統青年協会



ミャンマー

メイ・ス・ウイン

実践農業研究農場



ネパール

ビハーリ・チョウダリ

BASE 一後進社会のための
教育協会



フィリピン

**メイ・グレイス・
マグランイ=マブロック**

WAND - 水・森林農法・
栄養・開発基金



シエラレオネ

**ファトマタ・カマラ・
フランセス**

マバン・コミュニティ開発
プロジェクト



スリランカ

**カラーゴダ・パティラナゲ・
マルジャ・アルノドゥ**

サンナサ開発基金



タイ

ケスイリン・ピブーン

持続可能な農業共同体
推進協会



ジンバブエ

ムネーツィ・ホコニヤ

ジンバブエ・メソジスト教会



研究科生

リベリア
**ミアタ・ロバーツ・
サリーフ**

チャーチ・エイド法人